

世界のタクト 中高生と共演



本番前の最後の指導をする佐渡裕さん＝30日、行橋市今井

指揮者・佐渡裕さん、行橋できょう育徳館生と

交流3年の集大成。世界のマエストロが行橋に。国際的な指揮者として知られる佐渡裕さん(60)が、交流を続けてきたみやこ町の育徳館中学・高校管弦楽部の前でタクトを振る「奇跡のコンサート」が31日、行橋市の市民体育館で開催される。コロナ禍で開催が延期され内容も変更となったが、世界を精力的に飛びまわるマエストロと、ティーンエージャーの本格的な共演に注目が集まっている。

講演きっかけ コロナ禍、リモート指導

さど・ゆたか 京都市出身。同市立芸術大でフルートを専攻。指揮は独学で、卒業後に故バーンスタイン氏や小澤征爾氏に師事。ウィーンを拠点に、欧州の一流オーケストラに多く客演を重ねている。国内では兵庫県立芸術文化センター芸術監督などを務める。2008～15年には「題名のない音楽会」(テレビ朝日系)の司会者として、お茶の間にも親しまれた。著書に「僕はいかにして指揮者になったのか」(新潮文庫)など。

交流のきっかけは2018年5月、佐渡さんの同市稲童での講演だ。13年に熊本市で開かれた公演の際に佐渡さんと懇意になった原田脩記念ギャラリー稲童館主の植田義浩さん(74)が、講演に招いた。

当日、同部がブラームスの交響曲を歓迎演奏。佐渡さんは「プロでも大変な難曲にひたむきに向かう姿に心を引きつけられた」と、自らタクトを取って指導し、再会を約束した。

その後、佐渡さんは多忙なスケジュールの合間を縫って、同校での演奏指導や講演などを続けてきた。佐渡さんは「育徳館の生徒の演奏は音楽学校の演奏にも引けを取らない」と、19年2月、部員たちに向けてメッセージを送った。

「行橋の街に音楽の喜びを与え、活性化につながり、高校生が世の中を動かすことを示すことができるなら共演しよう」

部員たちは期待に応えようと、プロでも手ごわいと言われるベートーベンの「第九」などを提案した。

その後の市なども交えた協議で、昨年5月に佐渡さんと部員、著名なソリスト、市民公募の合唱団を合わせ、総勢150人による「第九」のコンサートが企画され、合唱団の練習も始まった。

ところが、コロナ禍で実施は見送りに。市民らの合唱団も目の目を見ることがなく解散した。だが、佐渡さんは部員らとの共演自体は中止せず、コロナ後を見据えた延期を提案。その後

も、リモートで部員らに指導を続けた。

今回、市側の全面協力もあり、佐渡さんの来日に合わせ、内容を変更し、感染対策をするなどして実施が決まった。

31日はチャイコフスキーの「交響曲第5番」が披露される。市立行橋中の吹奏楽部を佐渡さんが初指導するコーナーも設ける。チケットは完売したという。

育徳館の管弦楽部長の高校3年神明里さん(18)は「佐渡先生に直接教えていただいた奇跡に感謝しながら、音楽の感動を伝えたい」、部顧問の皆川真紀主幹教諭(54)は「3年間の成果を出すことができた」と話した。

佐渡さんは取材に対し「この出会いを大事にし、約束を果たしたい」との思いでやってきた。コロナで悔しい思いをし、形は変わった演奏会になったが、終息した時には、行橋市民の合唱団と育徳館のオーケストラとともに第九の演奏を実現したい」と語った。

(小浦雅和)